



出雲大社 島根県出雲市

オオクニヌシの国譲り神話に登場する出雲大社はさまざまな神代からの伝承が残る出雲国を象徴する神社として特別な崇敬を集める。本殿は「大社造り」と呼ばれる建築様式で「神明造り」の伊勢神宮と双壁をなす。



天安河原 宮崎県高千穂町

アマテラスを祀る天岩戸神社の近くを流れる岩戸川。そのほとりには巨大な岩盤と洞窟がありおびただしい数の石積みがある神秘的なエリア。ここは天岩戸神話において八百万の神々が集まり岩戸開きの相談をした場所「安河原」である。



三輪山 奈良県桜井市

崇神天皇の夢に現れ、またオオクニヌシに国造りをアドバイスしたオオモノヌシを祀る三輪山。「三輪山伝説」の舞台。山そのものをご神体とするため御本殿を持っていない。山腹には巨石群が残っており、この一体が古代から特別な祭祀の場であったと想像される。

古事記

自分編集



古事記について

現在、最古の歴史書。天武天皇が発案者。歴史のみならず、神話・伝説・歌謡・祭祀・信仰・芸能など日本文化全般に関わる記事が多く、さらには道教・儒教・仏教など多くの外来の宗教や信仰も。神道を心棒する人には聖典とされる。神々から天皇にいたる系譜を公的に記録した大古典。
 上巻：神代の物語。天地、国生み、神々の誕生。
 中巻：人代の物語。神武天皇～15代応神天皇までの歴史。
 下巻：16代仁徳天皇～33代推古天皇までの歴史。

日本書紀との違い
 重なる記述も多いが違いも明確。古事記は物語性が強く、日本文で書かれている。日本書紀は歴代天皇の事績の記述が多く漢文で書かれている。古事記は国内向け、日本書紀は海外諸国へ向けた歴史書としての扱い。

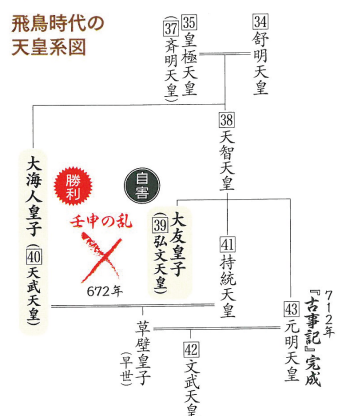
古事記というと神話が連想されるが実際には中・下巻で「人皇の時代」が記述されている日本の黎明期の歴史書である。国の成り立ち、天皇家が日本を統治することの正当性を万人にわかりやすく説明しようとした。

古事記編纂にいたるまで

672年、天智天皇（中大兄皇子）の弟・大海人皇子と天智天皇の息、大友皇子との後継争い（壬申の乱）が勃発。大海人皇子が勝利し、皇位につき天武天皇となった。内乱のため国民から不信を買った皇室の権威を取り戻すため、朝鮮（百済）や中国（唐）に独立した国家であることを示すために国史をまとめることにした。稗田阿礼が「誦習」していた『帝皇日継』（天皇の系譜）と『先代旧辞』（古い伝承）を太安万侶が書き記し、編纂したもの。しかし実際に編纂が完成したのは天武天皇の没後。その姪にあたる元明天皇の時代だったといわれる。再編は藤原不比等（藤原鎌足の次男）によるもの。

壬申の乱と天武天皇の改革

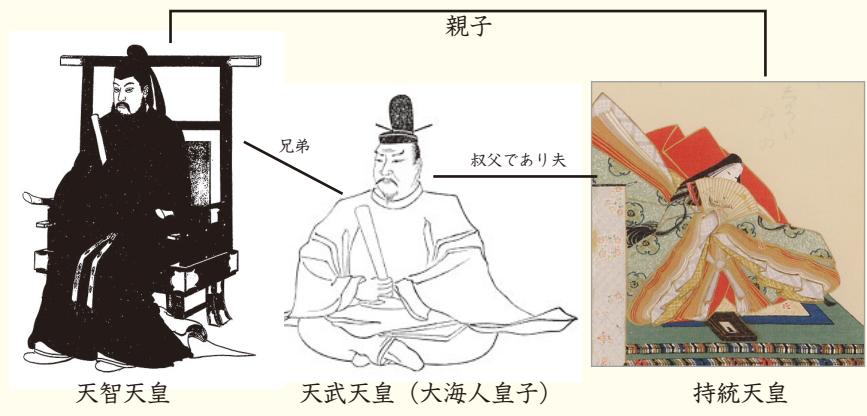
内乱に打ち克った天武天皇は、大胆な政治改革に取り組んだ。
 天智天皇は弟の大海人皇子を皇太子としていたが、最晩年、息子の大友皇子を後継者に指名して病没。これを機に、大海人と大友のあいだに皇位をめぐる争いが起こる。（壬申の乱）
 ↓
 大海人軍は豪族を味方につけて大友軍を各所で破り、大友皇子は自害。大海人は飛鳥に宮を造って即位、天武天皇となる。
 ↓
 天武天皇は政治改革を開始し、『日本書紀』『古事記』の編纂を発案。
 ↓
 後の持統天皇も天武天皇の改革路線を推進する。



※数字は天皇の即位順。皇極天皇は譲位後、再び即位して高明天皇となった。大友皇子は『日本書紀』に天皇に即位したとする記述はないが、明治時代に即位が認められ、『弘文天皇』という諡号（しごう）を受けた。

『古事記』の構成

和銅5年(712)に成立、全3巻で構成される。
上巻…神代の物語
 天地開闢、神々の誕生から、ウカヤフキアエズがタマヨリビメを娶（めと）ってカムヤマトイワレビコ（後の神武天皇）を産むまでの神話を収める。
中巻…人代の物語
 初代神武天皇～第15代応神天皇の歴史物語を収める。第12代景行天皇の皇子ヤマトタケルの英雄伝説、神功皇后の新羅遠征譚を含む。
下巻…人代の物語
 第16代仁徳天皇～第33代推古天皇の歴史物語を収める。ただし、第24代仁賢天皇以降は、事績の列挙が中心。



太安麻呂と稗田阿礼



藤原不比等



黄泉国を思わせる横穴式古墳の石室

黄泉国の描写については横穴式古墳のほの暗い様子をもとにしたものとする説が唱えられている。(奈良県明日香村、岩屋山古墳)

日本の古代人が考えていた宇宙の構造

古代人は「空」と「天」を区別していた。頭上に広がるのが空、さらにその上の神々が住まうところを天と呼んでいた。天の世界が「高天原」至高神アマテラスが統治する絶対世界である。古事記では高天原がいつ出来たのかは明らかにされていない。世界が出現した時にはすでにあったとされている。地上世界・人類の世界は「葦原中国」(あしはらのなかつくに)と呼ばれた。葦が茂る国の意味で未開の原野というニュアンスか、葦の旺盛な生命力を象徴としてとらえたか。葦原中国は高天原の支配下にあり、アマテラスの系譜の者(すなわち天皇)でなければ正当な統治者ではない。地下世界は「黄泉国」(よみのくに)と呼ばれる。死後の世界と解説されるが現世への往来が可能な場所としても書かれており、死無の世界観ではないようだ。古代の横穴古墳をイメージした世界ではないかという説もある。諸説はあるが少なくともそこは神でさえ試練を受ける異界とされている。

古代人の世界観



神話世界の主な神々

八百万の神」といわれるほどにたくさん神々が出てくるが、実はほとんどの神は名が紹介されるだけ。古事記にも300柱（柱は神を数える単位）以上の神々が登場する。この多さと難しい名前が古事記を読みづらくさせている。

八百万の神は「天つ神」と「国つ神」に分類される。天つ神は天界（高天原）に住まう神の総称。その最高神が人格化したアマテラスオオミカミ。天皇家の始祖とされるこの神が古事記神話の主人公のようなものである。

※古事記に一番最初に登場するのは宇宙の根源神アメノミナカヌシ。この神の六代後に現れるのがイザナギ・イザナミでイザナミを亡くしたイザナギが禊を行った際、左目から生まれたのがアマテラス。

アマテラスからウケイ（占いのようなもの）によって生まれたのがアメノホシホホミで、その子のニニギが葦原中国の統治者として地上に下る。これが「天孫降臨」でさらにニニギの孫にあたるのが初代天皇・神武である。

一方、国つ神とは地上（葦原中国）に属する神のことで代表格はオオクニヌシ。国つ神は天つ神への抵抗勢力というわけではなく、オオクニヌシは出雲の国を作ったあと天つ神のタケミカズチに譲っている。古事記では国つ神は天つ神の協力者として書かれていたりする。



神世七代

アメノミナカヌシを筆頭とする創世主。上段5柱は事天つ神、中段にイザナギ・イザナミ他の夫婦10柱を描く。

☆神々はどのように生まれるか

成る：根源の生命から成りだすこと。一柱の神の血や涙、神が手にした刀、あるいはその死体などからも新たな神が成る。生まれる：男女神がペアとなりまぐわいをする事で新たに生まれ出ること。特に女神の腹から出産されるわけではない。

☆重要な神は禊とウケイで誕生した

・禊（みそぎ）

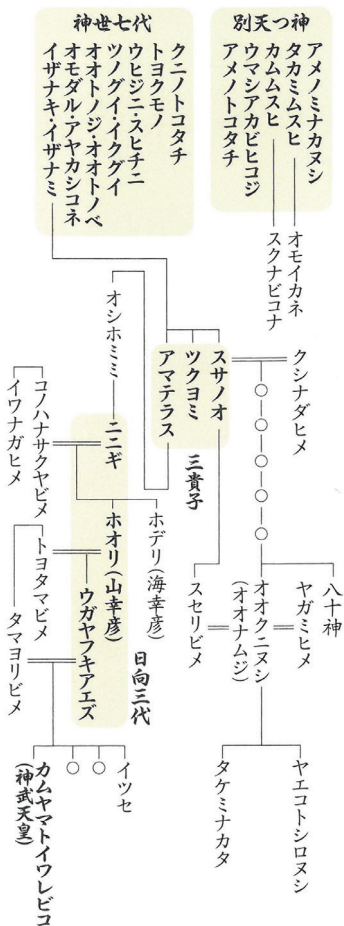
イザナギが黄泉の国で付着した穢れを水で清めた際、洗った目からアマテラスとツクヨミ、鼻からはスサノオが成り、投げ捨てた服からもいくらかの神が成っている。

・ウケイ

ウケイ（誓約）は古代の占いの一種。あらかじめ事の結果を誓い、その通りになるかどうかで神意を知るもの。アマテラスとスサノオお互いが成らせた神の性別によって判定するウケイを行い、その中でタケリビメやアメノホシミミなどたくさん神々を成らせた。

例）「美しい姫神が成ったら悪意がないこととする。」（スサノオの例）

神武天皇に至る神々の系譜



一見複雑だが、アマテラスから神武天皇への系譜に注目すると、わかりやすくなる。

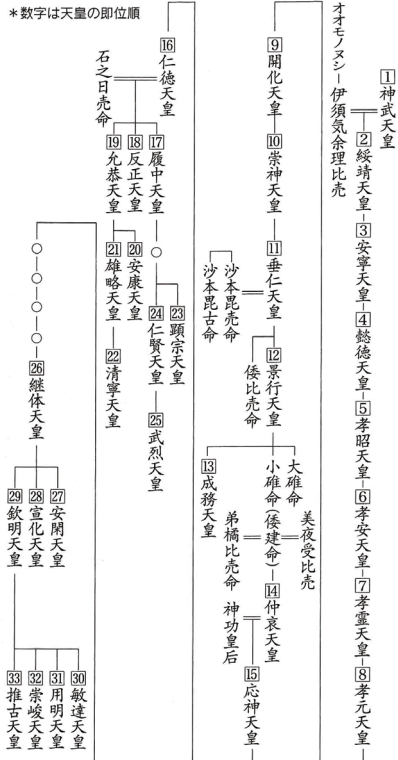
神々の血をひく天皇家

古事記では天皇を「すめらみこと」とよむ。すめら、は最高。みことは高貴な存在の言葉を伝えるもの。すなわち天つ神の言葉を取り次ぐ、葦原中国の正当な統治者に対する称号。アマテラスから地上の世界の統治を任された孫のニニギは高天原から九州の高千穂に降り立った。3代に渡りその地にとどまるがその次の代のカムヤマトイワレビコはより都にふさわしい地を求めて東へと、土着民との戦いを経て大和に入り橿原宮で天皇に即位した。これが初代天皇・神武である。神武天皇については架空の人物である説が有力で記述も史実性も薄い。しかし少なくとも古事記の編纂が始まった7世紀には初代天皇・神武についての何らかの伝承があったと考えられる。

神武天皇のポイントはただ初代というだけではない。アマテラスの末裔という点が強調されがただが、天つ神だけでなく国つ神の血も受け継いでいる。神武の祖父のホオリ(山幸彦)は国つ神のオオヤマツミ(山の神)の娘を母とし、神武も国つ神のオオワタツミ(海の神)の娘を母としている。神武の妻は大和のオオモノヌシの娘。天つ神、国つ神、山の神、海の神、大和の神などあらゆる神の系譜が初代神武の身体でひとつになり統治者として理想的な血脈がそこに流れ込んだ。その事を歴史的事実として示すことこそが古事記のメインテーマだといえる。

そして神武以後、内紛や戦乱を繰り返しながらも代々の天皇にその血脈が受け継がれていることを古事記は示そうとしている。

古代天皇の系図



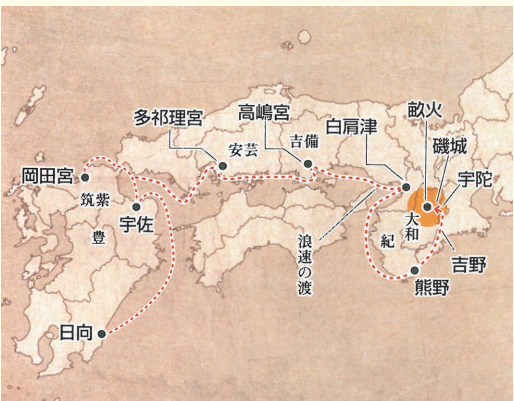
皇位は直系継承が原則だが、仁德天皇以降は、兄弟での継承が目立つ。



崇德天皇陵
 大型の前方後円墳は強大な王権の証だと考えられている。



神武天皇
 東征中の神武天皇の弓の先端には敵の目をくらませたトビが留まっている。



神武天皇東征の経路
 古事記によると初代天皇は九州から都にふさわしい土地を求めて東に向かったという。

三種の神器の謎

現代にまで伝承する神話に由来する神宝。天皇の地位を保証するものにはアマテラスにつながる血筋の他に勾玉・鏡・剣の「三種の神器」がある。王権の象徴として代々の天皇に受け継がれてきた。当の天皇でさえ実見が許されていない秘宝なのでその実像は謎。由来については神話に明記されている。古事記によればニギがアマテラスの命を受けて高天原から葦原中国に降る時（天孫降臨）アマテラスがニギに三種の神器を授け、とくに鏡については「この鏡を私の魂と思い私を祀るように清めてお仕えしなさい」と告げた。三つのうちで一番重要な秘宝とされている。

古事記では天岩戸にこもったアマテラスを外に誘い出すために作られたものとされており、アマテラスの姿を映しだしたから、アマテラスの分身とされる。勾玉も天岩戸の時に作られた。勾玉はめのうや水晶でできた三明形の玉とされる。美しい色と形から生命力や魂の象徴とされた。三種の神器の勾玉はアマテラスの魂のシンボルとして見る事ができる。

剣はスサノオがヤマタノオロチを退治した時にオロチの尾から見つけた霊剣。高天原に戻ったスサノオはそれを姉・アマテラスに献上した。そしてこの剣はアマテラスからニギへ受け継がれた。

その後、12代景行天皇の皇子ヤマトタケルノミコトの手に渡る。ヤマトタケルがこの剣で草をなぎ払って野火を裂け、東国を平定していく。この「草なぎの剣」（別名：アマノムラクモ）は日本の平定を保証する神器といえる。現在、天皇が所有しているのは勾玉のみ。鏡は伊勢神宮、剣は熱田神宮に祀られ、皇居にあるのは分身とされている。



草薙剣とヤマトタケル

英雄であるヤマトタケルは三種の神器の一つである霊剣・草薙剣によって危機を乗り越え、東国を平定していく。



三種の神器と天孫・ニギ

勾玉を重ねた首飾りをつけ、腰に草薙剣をたずさえ、手に鏡を捧げ持っている。



鏡・勾玉・剣

三種の神器の実像は謎だが、その形状は古代の遺物からある程度は推測できる。ただし草薙剣については特殊な形をしているという説もある。



直張文鏡（奈良県広陵町大塚新山古墳出土、古墳時代／宮内庁蔵）



勾玉（佐賀県唐津市没田遺跡出土、弥生時代／京都大学人文科学研究所蔵）

古代豪族の世界

古代の名門豪族は天皇家と血でつながっている。古事記編纂時に存在した豪族や貴族のルーツを記してある。じつは古事記には200もの氏族の出自や由来が掲載されており、天皇家だけではなく仕える氏族の系譜を記録する役割も担っていた。たとえば中臣(のちの藤原氏)は「天岩戸開き」で祝詞を詠み上げたアメノコヤネを祖先にもつと語られている。初代天皇・神武の章ではあらゆる地方豪族など18もの氏族が派生していることが記されている。つまり大和政権に服属する全国の豪族たちが天皇の子孫と血で繋がっていることを語っており、天皇が日本を統治することの正当性をさりげなく強調している。

ところで古事記にはニギハヤヒの天孫降臨とは別に地上に降臨し神武の東征以前に大和に住み着いていニギハヤヒという天つ神が出てくる。ニギハヤヒは東征してきた神武天皇にすぐ服従するがこの神は豪族・物部氏の祖先とされる。

この解説には諸説あるが、古代有力な軍事氏族として天皇家に仕えた物部氏は独自の降臨神話を伝承したと伝えられており、古代研究の注目を浴びている。

『古事記』に登場するおもな豪族・氏族

そが蘇我	孝元天皇の孫・建内宿禰の末禰。天皇家の外戚となって栄えたが、大化の改新後に没落。
ものべ物部	天つ神ニギハヤヒを祖とする大和の豪族。軍事部門を担当したが、ライバルの蘇我氏によって勢力を奪われる
おおもた伴	天孫降臨で登場するアメノオンヒを祖とする。物部氏と並んで軍事部門を統括し、武門の名門氏族に。『万葉集』の編纂者・大伴家持など。
いづも出雲	アマテラスの勾玉から生まれたアメノホヒを祖とする。出雲を本拠とし、首長(出雲国造)を現在まで世襲しつづけている。
なかとみ中臣	天の石屋戸開きで祝詞をあげるアメノコヤネの後裔。宮廷の祭祀・神事を司り、河内国が本拠。藤原氏の前身。
おわり尾張	ホノアカリを祖とする尾張地方の豪族。首長(尾張国造)を世襲。草薙剣を祀る熱田神宮の神主を務める。



ニギハヤヒの帰順

物部氏の始祖、ニギハヤヒは神武天皇に帰順。有力豪族も天皇家の傘下に入った。



神武天皇と豪族

日本書紀によれば、神武天皇は即位後すぐに皇祖天津神を祀った。豪族も多く従っていただろう。

日本最古の和歌

「八雲立つ 出雲八重垣 妻ごみに 八重垣作る その八重垣を」

ヤマタノオロチを退治し、クシナダヒメを妻に迎えて出雲の須賀に宮を作ったスサノオが詠んだ和歌。宮の立派な垣根を讃えている。古事記には112首もの歌が収録されており、とくに中・下巻は頻繁に歌が交えられ、ミュージカルのような形で展開している。このことは古事記の原型となっている物語が文字化されるはるか以前には歌によって語り継がれていた可能性がある。

歌人・紀貫之はスサノオを実在の人物とし、古事記で一番最初に現れた歌を日本最古の歌とした。このスサノオの歌自体は古事記成立以前から出雲にあった新築祝いの歌ではないかと言われている。

現代に生きる神話

天岩戸開きは神楽と芸能のルーツ。スサノオの横暴に怯えたアマテラスが天岩屋に隠れた時、八百万の神は集まってなんとか日の神、アマテラスを誘い出そうと作戦を立てた。この時、ヒロインになったのがアマノウズメ。彼女は伏せた桶の上で踊りだし神がかりなトランス状態になると乳を出し衣も下げて秘部もあらわにして踊りながらストリップをした。これに神々はどっと笑って盛り上がり、すると笑い声をきいたアマテラスが怪訝に思い、そっと岩屋の戸を開けた。

このエピソードは神楽の起源を記したものとされ、アマノウズメは神楽や芸能の祖神として仰がれている。

数ある神楽の中でもこの神話とより密接なのが「宮中鎮魂祭」だ。この宮中祭では女官が宇気ふねと呼ばれる伏せられた桶のようなものの上に立ち、ホコで舟を突きながら舞う。その姿は神話の中のアマノウズメを彷彿とさせる。この祭りは旧暦の十一月の冬至に近い日に行われていた。1年のうちで最も日が短くなる冬至を太陽の死と再生の日として祝う信仰は世界的に見られるが天皇の霊力を高めることを目的とした宮中鎮魂祭も、太陽の再生を願う冬至をルーツとするのだろう。そして天岩戸開き神話そのものを、冬至儀礼の反映とする意見もある。古事記に描かれた神話は神楽や祭りという形で今も息づいている。



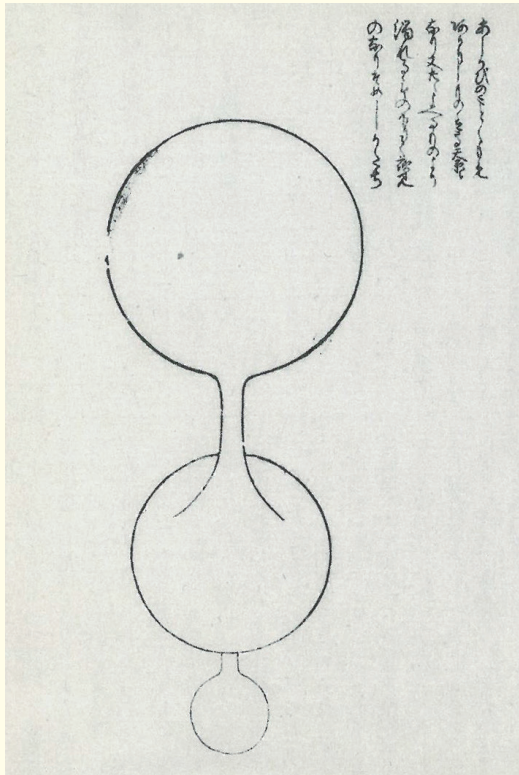
天岩戸開き
右下に桶に乗り、櫛を手にし踊るアマノウズメの姿がある。



スサノオとクシナダヒメ
大蛇を退治したスサノオは須賀に宮を築いてクシナダヒメと結婚し、多くの子をもうけた。その幸せをスサノオは歌にして残した。



高千穂の夜神楽
高千穂に今も伝承される夜神楽は、天岩戸開きでのアマノウズメの踊りが始まりと言われている。



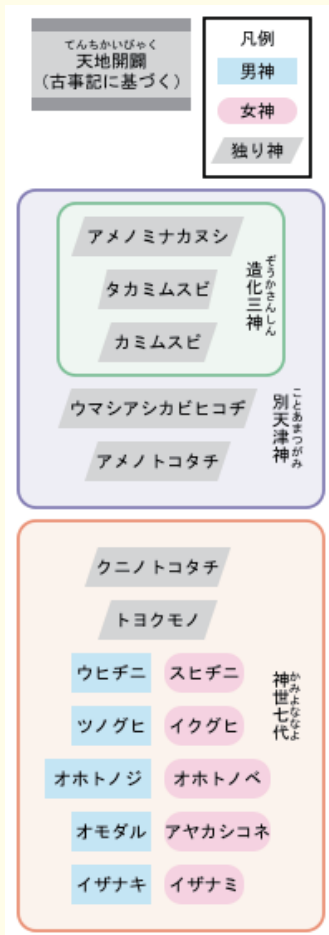
三つの世界の成立

三つの球体は上から順に、高天原、葦原中国、黄泉国。

天地開闢

天地がはじめて別れた時、高天原に最初に成った神の名はアメノミナカヌシという。次にタカミムスヒ、カミムスヒが成った。国が若く、クラゲのように漂っていた時に葦の芽が生え出るようにして成った神の名はウマシアシビヒコジ、アメノトコタチ。この2柱の神も男女対偶ではなく姿が見えなかった。ここまでの5柱の神を「別天つ神（ことあまつかみ）」と呼ぶ。

そしてその後、12柱の神が成る。神世七代という。神世七代の中の最後に成った兄弟がイザナギとイザナミである。クニノコタチとトヨクモノは男女対偶でなかったなのでそれぞれで一代、次に男女が並んで成った十柱の神については男女二神を合わせて一代と数える。



造化の三神

表舞台で活躍する神々の背後にいて重要な局面に登場する。

※3 ヒノカグツチを生んだあと、アマテラスは女陰を焼かれて床に臥せるがその時の吐瀉物や糞尿から生まれた神々はそれぞれ、鉱山・粘土・灌溉用水・食物の神の神格化とされており、冶金・窯業・農業（焼畑）つまり火を操る産業の誕生を表しているようだ。

※4 イザナギが妻を死に至らしめた原因であるヒノカグツチを斬り殺した時、刀剣に関する神々が現れ、したたった血からは清流の神々が生まれた。これらは刀剣の製作過程を表しているものと言われる。



イザナギとイザナミ

天の沼矛で海をかきまわしているイザナギとイザナミ

「ああ愛しい乙女よ」「ああ愛しい男よ」とイザナギの方から声をかけて再びまぐわった。すると2つの大きな島と6つの小さな島が次々に生まれ、国土が誕生した。次に神生みが始まり、山や水や野にかかわる神など合わせて35柱の神が次々に生まれた。しかしイザナミは最後に生んだ火の神ヒノカグツチに陰部を焼かれて命を落としてしまう。イザナギはヒノカグツチを斬り殺して、イザナミを失ったことを深く悲しんだ。

高天原の神々から「この漂っている国土を完成させよ」と命じられたイザナギとイザナミは天浮橋から矛をおろし海をかき回してオノゴロ島をつくりそこに降り立つと聖なる御柱を立て広大な御殿を建てた。夫のイザナギが「わたしの余ったところであなたの足りないところをふさぎ国を生もう」といった。二神は聖なる御柱をめぐってまぐわいはじめた。この時イザナミが「なんとまあ愛しい男よ」といい、それに続いてイザナギが「なんと愛しい乙女よ」と言った。ちぎりが終わるとヒルコというグニヤグニヤの子が生まれてしまった。占いで「妻の方から声をかけたのがよくなかった」とわかったので二神は再び御柱をめぐった。

国生みと神生み

※1 丹後国風土記によると天橋立は建造中に倒壊した天浮橋の一つだそう。

オノゴロ島の由来「自ずと凝れる島」自然に固まって出来た島、の意。

天の御柱は二神の屋敷の柱とも考えられるが婚礼の儀式用の単独の建造物という説もある。

※2 二神はたくさんの神をうみ、海、山、石、砂、霧、土、谷の神格化と思われるたくさんの神が生まれた。



上立神岩【淡路島】

イザナギとイザナミがおノコロ島に降り立ち、巨大な柱の周囲をまわって婚姻をおこなったという、「天の御柱」だともいわれている。



絵島【淡路島】

国生み神話に伝わる「オノコロ島」だとされる場所の一つ。



八島

本州・九州・四国・淡路・香岐・対馬・隠岐・佐渡などの「八つの島」の総称とされている。振り番号は生まれた順。

黄泉の国へ

亡き妻を偲ふイザナギは死の国である黄泉国へと向いそこでイザナミと再会する。

「愛しい妻よ、まだ国造りは終わっていない。一緒に帰ろう」「残念ですが私はもう黄泉国のかまどで煮たものを食べてしまいました。でも黄泉の神に相談してみましよう。ただしその間は私のことを見てはなりません。」

しかし待ちきれなくなったイザナギは御殿に入りイザナミの姿を見てしまう。そこで見たイザナミの姿は体が腐り、蛆がたかり、頭や胸には8種の雷神が出現してゴロゴロ鳴っていた。恐ろしいイザナミの姿を見たイザナギは恐怖のあまり逃げ出した。イザナギに恥をかかされたと激怒したイザナミは追手を遣わし、逃げるイザナギを追った。イザナギが髪を束ねていた黒いカズラを取って投げるとぶどうの実がなり黄泉醜女はそれを食べるのに夢中になった。黄泉醜女がおも追いかけてくるので今度は髪に指していたクシの歯を折って投げるとタケノコが生え黄泉醜女がそれを抜いて食べている間に逃げ延びた。さらに、黄泉醜女だけでなく8種の雷神が1500人も黄泉国の軍勢を従えて追跡してきた。イザナギは十拳剣（とつかつるぎ）をうしろ手に振りながら逃げた。現世と黄泉国との境の黄泉比良坂（よもつひらさか）のふもとまで逃げのびて来たとき、その木になっていた桃の実を3つとって投げつけた。それで、黄泉国の軍勢はことごとく退散した。

最後にイザナミ自身が追ってきてイザナギは千引（ちびぎ）の岩を黄泉比良坂に引いてきて坂をふさいだ。二神は千引岩をはさんで言葉を交わした。

「愛しい夫よ、こんな事をするのならば私はあなたの国の人間を一日10000人殺そう」

「愛しい妻よ、ならば私は一日に15000人の産屋を立てて見せよう」

このようなわけでこの世界では一日に必ず10000人が死に、15000人が生まれるのである。

※1 ブドウは鍾乳石、たけのこは石筍の連想とする説もある

※2 千五百とはとにかく大勢ということ。

※3 千引石=千人で引くほどの大岩。



千引岩

黄泉比良坂にある千引岩とされる岩。



千引岩を挟んで話すイザナギとイザナミ

イザナミの後ろには黄泉醜女たちがいる。



山桃の木

黄泉比良坂にある山桃の木。左に千引岩がある。



江田神社【宮崎】

みそぎの原点といわれる、江田神社。イザナギノミコト・イザナミノミコトを祀る由緒正しい神社。



禊池【宮崎】

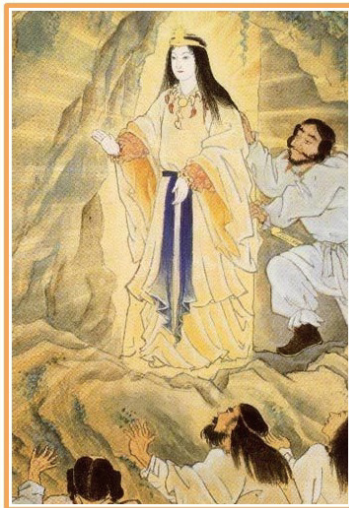
江田神社の裏手から5分ほど進むと、禊池がある。イザナギノミコトが黄泉の国の穢れをはらうために禊ぎを行ったといわれる池。

禊によって誕生した神々

黄泉の国から逃げおこせたイザナギは恐怖におののき、「なんと恐ろしいけがれた国を訪れてしまったのだ。私は禊をするべきだろう。」と言って筑紫の日向の小門の阿波岐原におもむき、禊をした。禊とはその身に罪、または穢れがある時、重要な神事を行う時などに河や海で身体を洗い清めることだ。禊を行うことで穢れ（気枯れ）を祓いパワーをよみがえらせるのである。

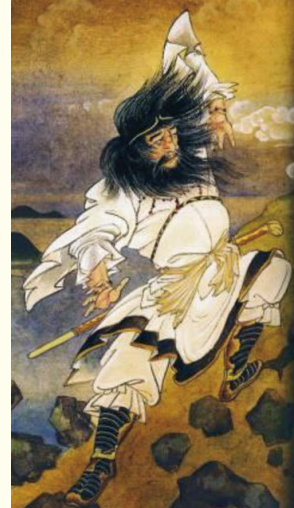
禊をするためにイザナギが身につけていたものを脱ぎ捨てると次々に神々が生まれた。禊の最後には重要な神々が生まれ、左の目を洗うとアマテラスオオミカミが、右の目を洗うとツクヨミノミコト、鼻を洗った時に成り出たのがタケハヤスサノオノミコトだった。これら3柱の神はのちに三貴神とされる天つ神である。イザナギは首飾りの玉の緒をアマテラスに与え「高天原を治めなさい」と言った。ツクヨミノミコトに「あなたは夜之食国を治めなさい」といい、スサノオノミコトに「あなたは海原を治めなさい」と言った。

禊の当初には黄泉国の穢れから禍つ神というマイナスのパワーを持った存在が生まれた。しかし禊が進むにつれプラスのパワーがよみがえり、やがて増幅していき最後には神々の中でも強大な力を持つとされる三貴神が生まれたのである。



三貴神

左からアマテラスオオミカミ、ツクヨミノミコト、スサノオノミコト。





武装するアマテラス

長い髪を解いて左右に分けて、耳の辺りで束ね角髪にし（男装）、大きい勾玉をたくさん紐に通したものを左右の髪と御纒（みかずら：蔓草を輪にして頭に巻きつけた飾し）に巻き付け、そして背中に千本、脇に五百本の矢を装着したといわれる。

この不可解なスサノオの行動については諸説あるが、時の為政者（アマテラス）を攻めたとする説がある。このくだりに記されている一連のエピソードは侵略者と為政者との抗争を描いたものかもしれない。

「ウケイをして子を生ましましょう。」
ウケイとは神意を伺う占いのようなもの。
アマテラスはスサノオから受けた剣を噛み砕き、それを吐き出すと三柱の女神（宗像三女神）が成った。スサノオはアマテラスから受けた髪飾りの玉か五柱の男神を成らせた。
「私の心がきれいだから私の剣から女神が生まれたのです。だから私の勝ちだ。」
「何のためにきたのだ。」
「父神の仰せで追放されたので事情を報告に参りました。邪心はありません。」
「でもどうすればお前の心が清らかであることがわかるだろう。」
「ウケイをして子を生ましましょう。」

姉弟対決

イザナギはアマテラスに高天原を治めるように、スサノオには海原を治めるように委任したが、スサノオは国を治めずただ泣きわめいていた。その泣く有様はさまさまな災いをもたらした。イザナギがスサノオになぜそのような泣くかと聞くと、スサノオは亡き母の国である根の堅州国に行きたい。だから泣いていると答えた。それを聞いて怒ったイザナギがスサノオに
「ならばお前はこの国に住んではならぬ」といい追放した。追放されたスサノオは姉神であるアマテラスに事情を報告しにいくが、国を奪われると思ったアマテラスは武装して待ち受けていた。



宗像大社 神勅【福岡】

天照大神が宗像三女神を 高天原から筑紫の国にお降しになりましたが、その時に授けられたのが上記の神勅。神勅とは『古事記』に記述されている天照大神の勅命（神様の出されたご命令）のこと。



宗像大社【福岡】

日本各地に七千余ある宗像神社、厳島神社、および宗像三女神を祀る神社の総本社である。全国の弁天様の総本宮ともいえる。



三女神の舞

天岩戸開き

身の潔白が証明されたスサノオはすぐに調子に乗り、アマテラスの幡屋の天井に穴をあけ皮をはいだ馬を投げ入れた。すると驚いた織女がはたを織る道具で女陰を突き死んでしまった。これにおののいたアマテラスは天岩戸を開いて中に閉じこもってしまった。すると高天原も葦原中国もすっかり暗くなり夜闇に包まれてしまった。困り果てた八百万の神は集まって思案を巡らせた。オモイカネノカミが次のような提案をし、早速実行されることになった。まず、常世の長鳴々を多く集めて鳴かせる。鏡と八咫鏡を突き通した玉飾りをつくらせ、櫛にそれをかけ、これをフトダマが捧げ持ち、アメノコヤネが祝詞をあげるとアマノウズメが岩戸の前で踊り出した。踊る内に服は乱れ、陰部もあらわになりそれでも踊り狂った。高天原がどよめき、神々の笑い声が響いた。神々が笑うのを怪訝に思ったアマテラスがそつと天岩戸を少しだけ開き、

「私がこもって世界は闇になり、葦原中国も闇であるはず。なのになぜ笑っているのか」と尋ねるとアマノウズメが「あなた様より貴い神がおいでになるので喜んでいなのです」と言う。アメノコヤネとフトダマが鏡を差し出してアマテラスにお見せした。アマテラスは奇妙に思いゆっくりと戸から出て鏡をのぞきこんだ。その瞬間、隠れていたアメノテヂカラオがその手をとってアマテラスをひきずり出した。こうしてアマテラスが再び、出てくると高天原も葦原中国も照り輝いた。この後、八百万の神はスサノオノミコトに多くの贖罪を負わせ、手足の爪を抜いて追放した。

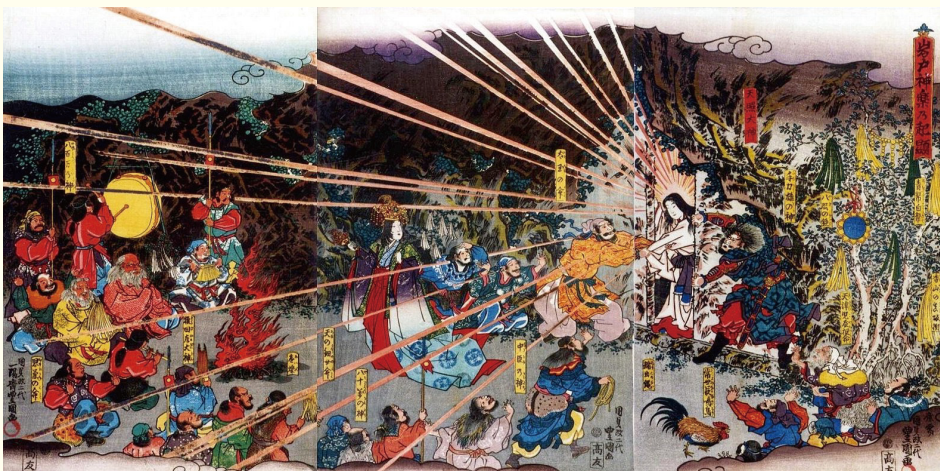
※女陰をついて死ぬ

強姦されて死亡した事の暗喩とも言われる。特にスサノオが皮をはいだ馬を天井から投げ落としたことに驚き女陰を突いて死んだというのは象徴的。馬は男性器のシンボルであり、その皮がはがされているということは…。暴行されて死んだことを示しているのかもしれない。



天の岩戸開きの絵画

神話の中でも特に有名なシーンなのでたくさんの絵画がある。



アマテラスが岩戸に隠れたために世界が闇になったというのは日蝕のことだとする説もある。太陽神・アマテラス、月の神・ツクヨミだが、弟のスサノオはそもそも何の神であるのか明確ではない。暴風の神とも言われるが姉たちが天体を表していることから何らかの天体現象を表していると思われる。東南アジアに分布する日蝕起源神話 / 三兄弟型と呼ばれるものにも太陽と月が兄弟（姉妹）で三番目の行いの悪い弟がやがて妖星となり日蝕・月蝕を引き起すとある。

八俣の大蛇征伐

ヒゲと爪をはがされて高天原から追い払われたスサノオは出雲の国の肥の国に降り立った。ふと見ると箸が川の上流から流れてくる。川を上っていくと乙女を囲んで泣く老夫婦に出くわした。

「おまえたちは誰だ。なぜ泣いている。」

「私は国つ神でアシナヅチ、娘はクシナダヒメと申します。毎年八俣の大蛇が襲ってきて私の娘を食べてしまうのですが、今がちょうどその時期なので泣いているのです。」

クシナダヒメを助けることに決めたスサノオはまずヒメをクシに変身させて髪に挿し、アシナヅチには8つの垣根を作りめぐらし、その門ごとに強い酒を入れた器を柵に乗せて用意するように命じた。やがて8つの頭を持つ大蛇がやってきた。そしてそれぞれの頭が酒を飲みだして酔いつぶれてしまった。スサノオはそこへ剣を抜いて斬りかかった。尾を切った時、その中から見つけたのが天叢雲剣（草薙剣）である。大蛇を退治したスサノオは出雲の須賀に宮を建てて住み着き、クシナダヒメを妻に迎えて子をもうけた。

※スサノオは天叢雲剣をのちにアマテラスへ献上する。これがのちに三種の神器のうちの一つとなる。

クシナダヒメを妻に迎えて宮を建て、常に雲が起こり雨の多い出雲の地を見てスサノオは歌を詠んだ。日本最古の和歌とされている。

「八雲立つ 八雲八重垣 妻籠みに 八重垣つくる その八重垣を」

現代訳：

いくつも雲がわき起こり、雲が幾重もの垣となる。

夫妻をこもらせようとして 八重もの垣を作るのだ。その素敵な八重垣を。



スサノオとクシナダヒメ

大蛇を退治したスサノオは須賀に宮を築いてクシナダヒメと結婚し、多くの子をもうけた。その幸せをスサノオは歌にして残した。



八岐の大蛇を退治するスサノオ



だんじりの山車の彫刻

だんじりの山車の彫刻の題材にもよく使われる。

オオクニヌシは二度死ぬ

スサノオの子孫・オオクニヌシ（オオナムジ）はヤガミヒメへ結婚の申込みをしようと因幡の国へ向かう大勢の兄弟神のお供として付き従っていた時、丸裸にむかれ泣いている兎に出会った。話をきくと「私は隠岐の島からこの地に渡ろうと思ったが、渡る手段がありませんでした。そこで、ワニザメを欺いて、『私とあなたたち一族とを比べてどちらが同族が多いか数えよう。できるだけ同族を集めてきて、この島から気多の前まで並んでおくれ。私の上を踏んで走りながら数えて渡ろう』と誘いました。すると欺かれてワニザメは列をなし、私はその上を踏んで数えるふりをしながら渡ってきて、今にも地に下りようとしたときに、『お前たちは欺されたのさ』と言いました。すると最後のワニザメは、たちまち私を捕えてすっかり毛を剥いでしまいました。」という。兄弟神たちが「海水を浴びて風に当たれば治る」と嘘を教え、その通りにした兎は体が傷つき泣いていたのだった。オオクニヌシは「真水で身体を洗い、がまの花を塗りなさい」といってその通りにすると傷は癒えた。この兎が因幡の白兎である。兎はオオクニヌシに「ヒメはきつとあなたを選びます」と言った。

ヤガミヒメが住まう館に到着し、兄弟神から求婚を申し込まれたがヤガミヒメは受け入れなかった。ヤガミヒメは遅れてやってきたオオクニヌシに「オオクニヌシと結婚します」と言った。怒った兄弟神たちはオオクニヌシを殺そうとした。焼いた岩を転がし落とされ、大木の割れ目に挟まれオオクニヌシは命を落とすが母神サシクニワカヒメの力によってよみがえる。それでもまたオオクニヌシは命を狙われ、再度命を落とす。また母神の力によって蘇り、母神に言われた通りオオヤビコノカミの所へ逃げた。それでも尚、兄弟神たちが追ってきたのでオオヤビコノカミはオオクニヌシを逃がしながら「スサノオのおられる根の堅州国へ行け」と言った。

※スサノオが出雲を出て、根の堅州国へいつ赴いたかについての記述は古事記にはない

※根の堅州国と黄泉国の違い

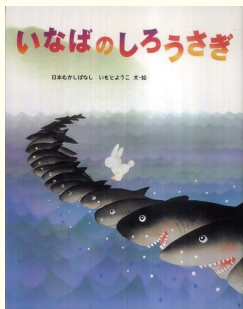
【根の国（根堅州国）】
全てが生まれ帰っていく根源の国。古来は神の力（幸いや禍い）もそこから客人（まろうど）として来て帰っていくとされた。「この世と隔たってはいるが行き来は可能」な世界。

【黄泉国】
ヨミⅡ古代の日本語（やまとことば）で、暗く死の穢れの世界。
日本では死は「気枯れⅡケガレ」で、それに関わるモノに触れるだけで生きる力を奪われる（疫病などの現象から来た考え）と信じられた。「この世と完全に隔たっており、二度と帰れない」世界。

古代では「死ⅡケガレⅡ二度と戻れない場所」と「あの世Ⅱ根源の国」は必ずしも同じではなく、それぞれの地方で畏れ敬っていたが、朝廷が「各地の民族を支配するには一つの話であるとした方が理解させやすい」という事でまとめてしまった説がある。

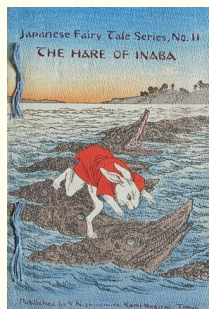


因幡の白兎とオオクニヌシの銅像【出雲大社】



因幡の白兎の絵本

絵本になるなどして、人気の高いエピソードである。右は明治時代に海外向けに販売されたちりめん絵本。



スサノオに認められたオオクニヌシ

オオヤビコノカミに言われた通りスサノオが治める根の堅州国へ行ったオオクニヌシはそこでスサノオの娘であるスセリヒメを見初め、たちまち結ばれた。

ヒメが「とても立派な神が来られました」ちスサノオに告げると「これは葦原醜男というのだ」といい、オオクニヌシを蛇の室に入れた。スセリヒメは密かにオオクニヌシに蛇よけの比礼（スカーフのようなもの）を授け、「この比礼を3度振って、打ち払いなさい」と教えた。教えられた通りにすると蛇はおとなしくなった。次の日の夜はムカデが蠢き、ハチが救う室に入れられた。スセリヒメは再びムカデとハチを寄せ付けない比礼を授けたのでオオクニヌシは無事だった。スサノオは次に鳴鏑を野原に射込み、その矢を取ってくるように命じた。そしてその野原に火を放った。困ったオオクニヌシの前にネズミが現れ、「うちは富良富良（ほらほら）、中は須夫須夫（すぶすぶ）」と言った。その場を踏むと落ち窪み、穴となつたのでそこに隠れるとその間に火は消えていった。しかもそのネズミが鳴鏑を拾ってきて、オオクニヌシに献上した。さすがにあの炎ではオオクニヌシは死んだだろうと様子を見に来たスサノオが焼け野原を見に行くと、オオクニヌシが現れて鳴鏑を賜った。



大国主命 (オオクニヌシノミコト)



大豊神社 境内末社の大国社【京都】

狛ねずみ。雄雌の対になっており、雌は水玉（酒器）を抱えており、雄は巻物を持っている。



古代出雲大社 (復元CG)

平安時代の平安時代の出雲大社本殿

1/10 の出雲大社本殿の模型。古代出雲歴史博物館収蔵。

スサノオはオオクニヌシを連れて帰ると今度は自らの頭に巣くうシラミを取るように命じた。しかしその頭にはムカデがたくさんいてとても危険だった。ヒメはそこでムクの実と赤土をオオクニヌシに授けた。オオクニヌシが木の実を噛み砕き、赤土を含んでツバを吐き出しているのを見て、スサノオはオオクニヌシがムカデを噛み砕いて吐き出したと思ひ感心しながら眠った。オオクニヌシは眠っているスサノオの髪をその部屋の柱にくくりつけて大きな石で塞ぎ、スセリヒメを背負うと生太刀と生弓矢、アメノノリ琴を持ち出し逃げた。その時、アメノノリ琴が木に触れて、大地が鳴り響いた。寝ていたスサノオは驚き起きて、部屋を引き倒してしまった。2人はスサノオが髪をほどいている間に遠くへ逃げた。スサノオは黄泉平坂まで追いかけ大声で

「お前のもっている生太刀と生弓矢を使い、お前の兄弟神を追い払い、お前が大国主となれ！我が娘を正妻とし、うかの山の麓に地底の岩盤に届き、高天原に届くほど高い宮柱をもった宮殿を建てよ！」と命じた。

オオクニヌシはその命の通り、兄弟神を追い払い、天にまで届きそうな宮を建てた。

※古代の出雲大社はその当時世界最大の木造建築であったと推測される。その高さおよそ48mとする説もある。

オオクニヌシの国造り

オオクニヌシが岬にいとアメノカガミ舟に乗って小さな神が訪れた。名を尋ねても答えないので名を知っている人を探すとカミムスビの神のスクナビコナの神であることがわかった。高天原の神であるカミムスビの神が生んだ時に小さすぎて指の間から落ち、葦原中国にたどり着いたという。

「おまえ（オオクニヌシ）と兄弟になつて国造りをしなさい」とカミムスビの神が言う。

そこで2柱の神はともに国を統治しはじめたが国造りが完成する前にスクナビコナは海のむこうの常世の国にいつてしまった。これを現実的に解釈すればスクナビコナは志ななばで亡くなつてしまったのだろう。スクナビコナを失つたオオクニヌシは「これからのようにして国造りをすればいいのだ」と嘆いてた。その時、海を照らしてやつて来る神がいた。その神は

「我は汝の幸魂奇魂（さきみたまくしみたま）である。

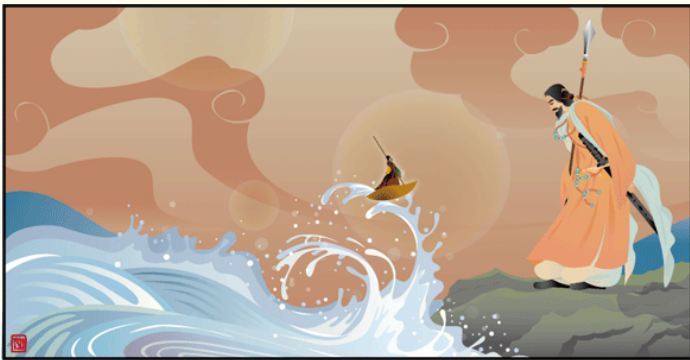
丁重に私を祀れば、国造りに協力しよう」と言つた。

どう祀るのかと問うと、大和国の東の山の上に祀るよう答えた。この神は現在三輪山に鎮座する神（オオモノヌシ）である。

※古事記に登場する高天原の天つ神を中央政権とするならば、葦原中国に住む国つ神は地方政権として考えられ、両者はしばしば敵対関係となることもある。もともと国つ神であるオオクニヌシの所へ天つ神であるカミムスビやスクナビコナの登場は敵対してもおかしくないがここでは天つ神がオオクニヌシの手助けをしている。これは天つ神（中央政権）の中でもいくつかの派閥があり、国つ神を武力で制圧する派ではなかったことを暗示している。ちなみに国つ神でオオクニヌシの暗殺を何度も企てたオオクニヌシの兄弟神は中央政権（天つ神）の武力派によつて手なすけられた勢力であろうと考えられる。

オオクニヌシとスクナビコナ

スクナビコナは一寸法師のモデルとも言われる。



三輪山

三輪山は、ひときわ形の整った円錐形の山。古来より神の鎮まりますお山として、大物主神（おおもものぬしのかみ）の鎮まりますお山、神体山として信仰されている。禁足地であったが、明治以降は「入山者の心得」なるものが定められ、現在においてはこの規則を遵守すれば誰でも入山できるようになった。

葦原中国の平定

出雲国を建設したオオクニヌシはいよいよ葦原中国の平定に乗り出す。古事記における葦原中国は人間の住む世界である。だが、現実的に解釈するなら葦原中国とは人間の住む世界というより出雲国という限定された地域であろう。神々がすむ高天原とは天皇家を中心とする中央政権を暗示する。このように考えるならオオクニヌシが葦原中国を平定するということは出雲国の様々な勢力を制圧し、中央政権の支配下におく事を意味する。この先、古事記では高天原に象徴される中央政権がいかにして国つ神の支配する地方都市を従わせていったのが描かれている。

オオクニヌシに手なづけられる神々

高天原（中央政権）の最高責任者であるアマテラスは国造りが進む葦原中国を見て「葦原中国は我が子が治めるべき国だ」とオシホミミノミコトを派遣した。ところがオシホミミノミコトが高天原と葦原中国にかかる橋、天浮橋から外界の様子を眺めるとまだ騒然としていたので統治を諦めて高天原に帰ってしまう。そこでタカヒムスヒの神とアマテラスは天安河に八百万の神を集め、軍師であるオモイカネノカミに思案させた。そこでアメノホヒノカミを遣わすことにした。アメノホヒノカミは現地を偵察し、出来ることならオオクニヌシを説得するはずだったが結局、3年経っても帰って来なかった。オオクニヌシに懐柔されてしまったのだ。さらにこの後、2柱の神を遣わしたがいずれもオオクニヌシに懐柔されてしまう。

これはつまりオオクニヌシが高天原の精鋭たちをも取り込むかなりの人物であったことが推測される。そもそも古事記は高天原（中央政権）側から見た歴史書なので中央政権にとって脅威になる地方勢力の首長はもつと悪く書かれていてもおかしくない。それをこのように魅力ある人物として書かれているという事はオオクニヌシがすでに正史から消すことのできない人物だったのだろう。

オオクニヌシの協力者

葦原中国の支配者で有力な国つ神であったオオクニヌシを陰ながらサポートする高天原の神があった。造化三神の一柱、カミムスヒノカミである。先述にあったようにこの神はオオクニヌシが国造りをする際に助っ人としてスクナビコナの神を派遣してくれた。オオクニヌシはすでに高天原の神の一部を良好な関係を築いていたのである。そこへ割り込もうとする高天原の神にとって両者の良好関係は邪魔なものであった。とりわけアマテラスの後盾として君臨するタカミムスヒノカミはそう思っていたようだ。この神もまた造化三神として描かれる実力者である。



古道大元顯 幽分層図説

国学者の平田篤胤が書いた図で古神道的な世界観が示されている。世界をつかさどる神々の系譜が図解してある。

アメノワカヒコの死

アマテラスオオミカミは鳴女というキジに言葉を託して出雲へつかわす。鳴女は先に派遣されていたアメノワカヒコの家の門柱に止まり

「なぜ派遣されて8年も経つのに戻らぬのか」と鳴いた。

この鳴き声を聞いたアメノサグメ（出雲側の従者）がアメノワカヒコに

「この鳥の声はとても悪しきものなので撃ち殺すべきだ」とそそのかしたのでアメノワカヒコは高天原を出るときに授けられた弓と矢でキジを射殺した。するとその矢はキジの胸を貫いて高天原にまで飛び、天安川にいたアマテラスオオミカミとタカムスビの元に届いた。タカムスビがその矢を見ると矢に血がついていた。

タカムスビは「この矢はオオクニヌシを討伐するためにアメノワカヒコに授けた矢である」と告げ、

その矢を神々に示し、「もしアメノワカヒコが命令に背かず悪しき神を射た矢が届いたのならば、この矢、アメノワカヒコに命中するな。もし邪な心があるのであれば、この矢アメノワカヒコに命中せよ」と呪いの言葉を込めて天の穴から下界（出雲）に向けて落とした。するとその矢はアメノワカヒコの胸を貫きアメノワカヒコはあっけなく死んだ。

この物語はつまり高天原（中央政権）の将軍がオオクニヌシに懐柔されて寝返ったために、放たれた刺客によって暗殺されたという話であると推測される。



雉を射るアメノワカヒコ

アマテラスが遣わした雉をあめのワカヒコは射殺してしまう。



矢を返すタカムスビノカミ

「もしアメノワカヒコが裏切ったのであればこの矢よ、刺され」と呪いを込めて矢を射るタカムスビノカミ。

オオクニヌシの決断

葦原中国の平定が思いの他、難航するのでアマテラスは軍師のオモイカネに尋ねると天岩屋に住むイツノオハバリノカミ、あるいはその子であるタケミカヅチノオノカミを派遣するしかないということになった。

そしてアマテラスはアメノトリフネノカミを副官としてタケミカヅチにつけ、葦原中国に遣わすことにした。

2神はまずオオクニヌシの宮殿近くのいなさの小浜に降り着いた。そして剣を抜いて逆さにたてその剣先にあぐらをかいたまま、オオクニヌシに国譲りを迫った。

オオクニヌシは

「自分は引退した身である。それについてはわが子のヤエコトシロヌシノカミが答えるでしょう」と言った。

そこでアメノトリフネノカミを遣わし、ヤエコトシロノカミに尋ねるとあっさり

「この国は天津神に奉りなさいませ」と父のオオクニヌシに告げた。

高天原からの使者であるタケミカヅチの神が剣先にあぐらをかいて座ったというのは威圧的行動ととらえればいいがその後のオオクニヌシの対応が謎だ。自分では判断できないから子供に聞いてくれというのである。言い換えるなら自分はずでに第一線を退いた身であるから今の首長である子供にきてほしいという意味にも聞こえる。だが、あれほどさまざまな高天原からの使者を次々と懐柔してきたオオクニヌシらしからぬ小心さである。あるいはここにかかれたオオクニヌシと以前のオオクニヌシとは別の首長であった可能性もある。いずれにしてもこの気弱なオオクニヌシは出雲の行く末を子供の託宣に任せている。託宣を告げるのはヤエコトシロヌシノカミ（八重事代主神）である。この「代わりという神」とはおそらくある種の巫者（神官）であったのだろう。



諏訪大社 本宮【長野県】

タケミナカタを祭神としている諏訪大社。なお、本来の祭神は出雲系の建御名方ではなくミシャグチ神、蛇神ソノウ神、狩猟の神チカト神、石木の神モレヤ神などの諏訪地方の土着の神々であるという説もある。現在は神性が習合・混同されているため全てミシャグチが建御名方として扱われる事が多く、区別されることは非常に稀である。神事や祭祀は今尚その殆どが土着信仰に関わるものであるとされる。八幡神や住吉三神など他の信仰にも見られるように個々の祭神が意識される事は少なく、まとめて「諏訪大明神」・「諏訪神」として扱われる事が多い。

さて天津神が「ヤエコトシロヌシノカミは我々に従うように託宣したぞ」と詰め寄るとオオクニヌシのもう一人の息子であるタケミナカタノカミが千引石を片手に掲げながらあらわれ、「力比べをしよう」と挑んだ。すると天津神は手を氷の柱や剣の刃に変化させ、タケミナカタの手を逆さ掴みにしひきちぎり、放り投げた。タケミナカタは恐れおののき、長野の諏訪湖まで逃げ去り、そこで降伏した。天津神が出雲に戻ってそのことを告げるとオオクニヌシはついに観念して国譲りが行われた。

天孫降臨の前に立ちはだかる謎の神

様々な攻防があったがついに天津神が天降ることになった。ニニギノミコトがその命を受け、天降ることとなった。ニニギノミコトが高天原より天降る様子をアマテラスとタカミムスビノカミが見ているとその途中の天の八街という場所に一柱の神が立ちはだかつていた。その神は上は高天原を照らし、下は葦原中国を照らすほどのパワーを持つ高貴で美しい神であった。その神を畏れたアマテラスとタカミムスビノカミはアメノウズメノミコトを呼び、

「おまえは女だが向き合った神に一步もひかない強さを持っている。だからお前がいつて天下ろうとする道をふさぐのはだれかと尋ねよ」と命じた。

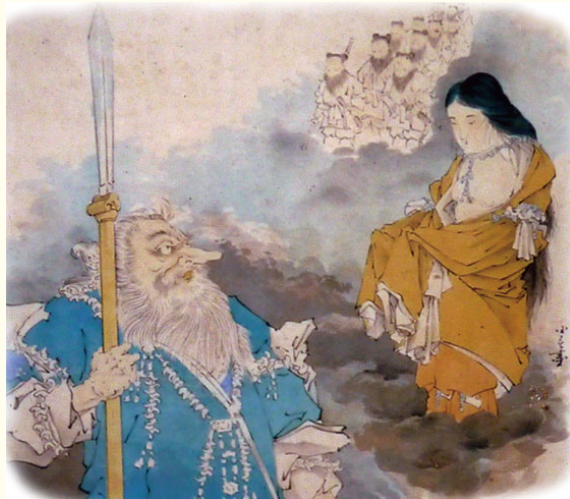
そこでアメノウズメが近づいて尋ねると

「私は国つ神の猿田毘古神といいます。天津神の御子が天降りられるときいたので先導として仕えようと思ひ参上しました。」と言った。

それにしても唐突に現れるこの神はいったい何者なのだろうか。古事記には国津神であるとだけ記されている。だが日本書紀にはもう少し詳細な、しかもかなり違った記述があり、天狗のような大きい鼻、赤く大きな目、大柄な体をしていた神などと記されている。恐ろしい異形の神だったというのだ。このエピソードの裏には、天津神に対してまだ抵抗する可能性のある国津神（地方勢力）が出雲の国に残っていたということだ。だから天津神側はアメノウズメをわざわざ使者にたて、様子を伺っているのである。アメノウズメとはどうやら優秀な交渉人であったようだ

物語ではこのあと、また唐突に猿田毘古神の名が登場する。ニニギノミコトはアメノウズメに「猿田毘古をその故郷（伊勢）まで送り、その神の御名をおまえが名乗り、仕えるように」と命じた。これ以降、アメノウズメは猿女君とも呼ばれるようになった。ある時、猿田彦神が漁をしているとヒラブ貝に手を挟まれあつけなく溺れ死んでしまう。悲しみ嘆いたアメノウズメは大小の魚を集め「おまえたちは天津神の御子に仕えるか」と迫った。魚たちはみんな「お仕えます」と答えたがナマコだけが黙っていたので小刀でその口を裂いたという。猿田彦とはオオクニヌシにも匹敵する実力者であったのかもしれない。

この話はアメノウズメに監視役をつけたにもかかわらず安心できなかった天津神の放った刺客によって猿田彦が暗殺されたことを伝えている可能性がある。その卑怯なやり方に怒ったアメノウズメが詰問して最後に暗殺者（なまこ）の口を割り、真相を吐かせたというのがこの奇妙な伝承の真実なのかもしれない。



サルタヒコとアメノウズメ

天孫降臨の一行の前に立ちはだかるサルタヒコに問うアメノウズメ。



猿田彦大神

國津神 國王を雨き
人間に導きし神
樺太社

サルタヒコは天狗の原型とされる

「鼻長七咫、背長七尺」という記述から、天狗の原形とされる。「天地を照らす神」ということから、天照大神以前に伊勢で信仰されていた太陽神であったとする説もある。

天孫降臨 〔高千穂へ、天皇家の祖神の誕生〕

アマテラスより八尺瓊勾玉と鏡、草薙劍（天叢雲劍）といった天孫の証となるいわゆる「三種の神器」を授かったニギノミコトとその一行はいよいよ地上に降り立ち、道をかきわけ天の浮橋から筑紫日向の高千穂に到着した。ニギノミコトはそれから吾田（現・鹿児島県）にうつり、「この地は海を隔てて韓国に近く、笠沙の岬を正面にみて朝日がまっすぐに差し、夕日が光り輝く国である。とてもよい土地だ」といい、そこに地底の岩盤にも届き、天まで届くほどの太い柱をたて統治の拠点となる宮殿を建設した。

それにしてもなぜ韓国が見える場所が「よい土地」なのであろうか。この事から天孫が実は朝鮮半島から渡来して葦原中津国を平定したという説を唱える人もいる。

高千穂の地に宮殿を建て、そこに落ち着いたニギノミコトは笠沙の岬で美しい娘と会う。名を尋ねると「コノハナサクヤヒメといます」と答えた。さらにニギノミコトが「あなたに姉妹はいますか」と尋ねると「イワナガヒメという姉がいます」と答えた。ニギノミコトが「あなたと結婚したい」と申し出ると「私の一存では決められません。父の大山津見神がお答えするでしょう」と答えた。

ニギノミコトは大山津見神に使者を遣わし、尋ねると神はおおいに喜び、姉のイワナガヒメとともに多くの品物をもって嫁がせた。だがイワナガヒメはとても醜かったのでニギノミコトは見るなり送り返してしまい、コノハナサクヤヒメだけをとどめて一夜の交わりをした。大山津見神はイワナガヒメを返されたことを深く恥じ、こういった。

「石長姫（イワナガヒメ）をとともに献上したのは天津神の御子の命が永久に揺るぎのないようにとの思いをこめたからです。木之花咲耶姫（コノハナサクヤヒメ）には、木の花が咲き乱れるように栄えるという意味が込められています。だがこのようにイワナガヒメを戻し、コノハナサクヤヒメだけをとどめたからには、これ以降、天津神の御子（天皇家）の寿命は木の花が散るようにはかないものになるでしょう」

それからほどなくしてコノハナサクヤヒメは懐妊した。だがたった一夜の交わりで身ごもったことを不審に思ったニギノミコトは「これは我が子ではない。どこかの国津神の子であらう」といった。コノハナサクヤヒメはこれに怒り「身ごもった子が国津神の子であれば無事に産まれず、天津神の子であれば無事に生まれるでしょう」といつて四方を壁に囲まれた戸のない八尋殿を造り、そこに火を放ち出産に望んだ。そしてコノハナサクヤヒメの予言通り、ホドリノミコト（火照命）、ホスセリノミコト（火須勢理命）、ホオリノミコト（火遠理命）が誕生した。最後に生まれたホオリノミコトは天皇家初代の王、神武天皇の祖神である。

このエピソードの中には世界的に見られる神話のパターンが含まれている。イワナガヒメを返すことによって寿命が限られたことになったことを説明しているがこれはいわゆる死の起源神話の原型だ。火を放ったところから三神が生まれるのは焼畑などがイメーজされている可能性がある。農地に火を放つことでより豊かな実りが約束されるという構造だ。



高千穂峡
高千穂峡の真名井の滝。

海幸彦の釣り針をなくした山幸彦

コノハナサクヤヒメが生んだ御子、ホデリノミコト（海幸彦）とホオリノミコト（山幸彦）。ある時、山幸彦が兄の海幸彦に「それぞれの道具を交換して使ってみたい」と頼んだ。だが海幸彦は承諾しなかった。三度頼まれても承諾しなかったが、とうとう最後に少しの間だけ交換することを承知して釣り針を貸した。だが山幸彦は結局、一匹の魚も釣ることができなかつた上、兄の大事な釣り針をなくしてしまった。海幸彦は大いに怒り、釣り針の返還を求めたが山幸彦はついに見つけられなかった。

そこで十拳剣を砕き、500本の釣り針をつくって渡そうとしたが兄は受け取らなかった。山幸彦が困り果て、泣き憂いて海辺にいとシオツチノカミ（潮流の神）が来てその理由を尋ねた。山幸彦が事情を話すとシオツチノカミが「私がなんとかしましょう」といい、かごの船を造り山幸彦をそれに乗せた。

「私がこの船を押し流せばよい潮の流れにのり進むでしょう。しばらくすると鱗のように並んだ宮殿にでます。そこがワタツミノカミ（海神）の宮です。その門の近くに井戸と清浄な桂の木があります。その木の上にいれば海神の娘が見つけて解決してくれるでしょう」

山幸彦がシオツチノカミに教えられた通りに進むと何もかもがシオツチノカミの予言通りになった。山幸彦が桂の木の上で待っていると海神の娘のトヨタマヒメの侍女が玉器をもって水を汲みにきた。山幸彦が侍女に水を求め、侍女は玉器に水を汲み差し出した。だが山幸彦は水を飲まず、首飾りの玉を解いて口に含み玉器に吐き入れた。侍女がそのままトヨタマヒメに差し出すと「門の外に誰かいるのですか」と問うた。「私たちの王のように貴く立派な方が桂の木の上にあります」と答えた。それを聞いたトヨタマヒメが山幸彦を見るとひと目で気に入ってしまった。ワタツミノカミもみずから出向き、「この方は高貴な天孫の御子だ」といって丁重にもてなし、トヨタマヒメと結婚させることにした。山幸彦は三年間そこにとどまった。だがある時、山幸彦は自分がここにいる理由を思い出したため息をついた。それを不審に思ったトヨタマヒメがワタツミノカミに言い、ワタツミノカミが山幸彦になぜ嘆くのか聞くと、山幸彦は今までの経緯を語った。



和都都美神社【長崎県対馬市】

豊玉姫（とよたまひめ）を祭り、山幸彦が失った釣り針を求めたどり着き、豊玉姫を妃としたと伝承される海宮の古跡。



山幸彦とシオツチノカミ

シオツチノカミが造った舟に乗り込む山幸彦。

ふたつの不思議な珠で海幸彦を制圧した山幸彦

娘婿である山幸彦の悩みを聞いたワタツミノカミはさっそく海に暮らす大小の魚を集め釣り針のありかをたずねた。すると魚たちは「この頃、赤鯛が喉に骨がささってものがたべられない」と嘆いていましたと申し上げた。ワタツミノカミが赤鯛の喉を探すとそこに海幸彦の釣り針があった。山幸彦はよろこび取り出して洗い清め、さっそく戻って海幸彦に差し出した。山幸彦はその時、ワタツミノカミに言われたことを実行した。竜宮を出るとき、ワタツミノカミは潮満珠と潮乾珠の2つを山幸彦に授けこういった

「この釣り針を兄上に返す時『この釣り針は於煩鉤（おぼち）、須須鉤（すすち）、貧鉤（まじち）、宇流鉤（うるち）と唱えながら後ろ手に渡しなさい。また兄上が高地に田を作ったらあなた様は低地に、低地に田を作ったらあなた様は高地につくりなさい。私は作物の出来をコントロールできる水神です。3年間で兄上様は貧しくなるでしょう。その時にあなたを恨んで攻めて来たら潮満珠を出して溺れさせ、苦しんで助けを求めたら潮乾珠を出して生かしなさい」

そのあとはすべてワタツミノカミの予言通りになった。山幸彦はワタツミノカミに教えられた通りの呪言を唱えながら釣り針を兄に手渡した。兄の海幸彦は予言通り、数年で貧しくなり少しずつ荒んだ心になって山幸彦を攻めてきた。そこで山幸彦はワタツミノカミの教え通りに潮満珠を出して溺れさせ助けを求めてきたところで潮乾珠で助けた。兄は最後に頭を下げ「これからはあなた様の護り人として仕えましょう」と頭を下げた。

この物語は長子と末子との間に起こった皇位継承をめぐる争いだが天津神（中央政権Ⅱ山幸彦）と国津神（地方勢力Ⅱ海幸彦）の闘争とも解釈することができる。物語の展開から察するに結局は天津神側が勝者となるのだが国津神側を攻め落とすのに3年も時間を費やしたということだ。その間に天つ神側は海神族（海の民）を抱き込み、国津神を攻めるタイミングをはかっていたのだろう。いずれにしてもこの一件によって天津神と国津神とのあまりに長かった闘争は一応の終わりを見るのである。



左：潮涸珠（しおふるたま） 右：潮満珠（しおみつたま）

宮崎県の鶴戸神宮の御神宝である。



山幸彦と海幸彦

塩満珠で海幸彦を溺れさせる山幸彦。

初代・神武天皇の誕生

弟の山幸彦が兄の海幸彦に勝利し世界を統治するようになって間もない頃、妻のトヨタマヒメ（ワタツミノカミの娘）が山幸彦（ホオリノミコト）の元へ訪れた。「私はあなたの子を身ごもり、はや臨月を迎えました。しかし天津神の御子を海原で生むわけには参りませんのでこちらに向いてきました」「トヨタマヒメはそういうとにわかにな産気づいた。慌てたホオリノミコトは急ごしらえの産屋を作ったが産屋を造り終わらないうちに陣痛が始まった。トヨタマヒメは産屋に入ると「異郷のものは子を生むときは本来の姿に戻ります。お願いですから私を見ないでください」と申し上げた。だがホオリノミコトは好奇心に勝てず産屋の隙間からこっそり覗いてしまう。すると中には巨大なワニ（鮫）に変身してうなるトヨタマヒメの姿があり、ホオリノミコトはこれを見て逃げ出した。トヨタマヒメは恥ずかしく思いこいつた。

「これからは海の道を通って多くの臣民とともに行き来しようと思っていました。なれど私の姿をのぞきみられてしまったのもうそれはかないません」といつて御子をそのままにして海原へ帰ると海と陸の境をせきとめてしまった。トヨタマヒメは海へ帰ったもののその後ホオリノミコトを恋しく思う心に耐えられずその御子を養育させるといふ理由で妹のタマヨリビメを遣わし次のような歌を託した。

「赤い玉はそれをつらぬく緒さえも光り輝き美しい。けれども白い玉のように輝いていたあなたのお姿も忘れられませんか」

ホオリノミコトはこう返歌した。

「私が生きている限り、沖のかもめが寄り集うあの遠い海神の宮殿で仲良く過ごした恋しい妻をどうして忘れることができようか」

この後、ホオリノミコトは高千穂宮を宮殿として580年を過ごした。その御陵は高千穂の西にある。その後ホオリノミコトとトヨタマヒメの間の御子は乳母であり叔母でもあるタマヨリビメをめぐり4柱の御子をもうけた。御子の名は、五瀬命、稲氷命、三毛沼命、若三毛沼命である。

この末子の若三毛沼命こそが初代・神武天皇となる神日本磐余彦尊（カムヤマトイワレビコノミコト）である。



鵜戸神宮【宮崎県日南市】

山幸彦とトヨタマヒメの御子を御祭神としている。



お乳岩【鵜戸神宮】

竜宮に帰ったトヨタマヒメが御子の育児のため、両乳房を神窟にくっつけて行かれた、と伝わる。「おちちいわ」は今もなお絶え間なく岩清水を滴らせて、安産、育児を願う人々から信仰されている。

神武東征

ある時、若御毛沼命（ワカミケヌノミコト）が思った、兄の五瀬命（イツセノミコト）と相談していうには「安らかに天下の政を執り行える場所がないだろうか。東へ行ってみよう」彼らはそれから日向を発ち、筑紫や豊後の宇佐を経てさらに筑紫の岡田宮にいたりそこで一年を過ごした。さらにその国を出て会場を東へ進み、さらに浪速の湾を経て河内の白肩津に船を停めた。この時、現地を支配していた登美のナガスネビコの軍勢と戦った。この戦いで兄の五瀬命は手に矢を受けて重傷を負った。

若御毛沼命は「私は日の神の御子であるのに日に向かって戦ったために痛手を負ってしまった。これからは日を背負って戦おう。」と誓い紀伊半島を南下して南から攻めこむことにした。だが深手を追った五瀬命は雄叫びをあげて絶命してしまった。

大和を統治する別の勢力とは

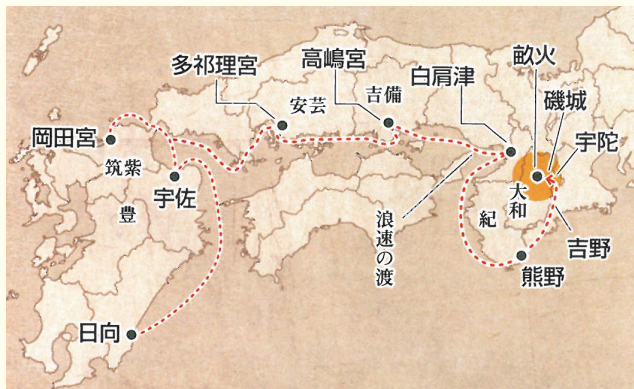
この後、若御毛沼命は直接的に大和に進行することをやめ、熊野から各土地の豪族を攻略しながら大和へむかった。その途中、アマテラスオオミカミとカミムスヒノカミから布都御魂（神剣）を授けられ導き手として八咫の鳥を遣わされるなどして苦戦しながらも大和地方の制圧に成功した。

この時最後まで抵抗したのが同じ天孫軍を名乗る ナガスネビコだった。つまり大和にはすでに別ルートから違う天津神の勢力が入っていた。その神とは邇芸速日命（ニギハヤヒノミコト）ニギノミコトの兄で若御毛沼命にとっては大叔父にあたる存在だ。ニギハヤヒノミコトは若御毛沼命よりも先に大和に入り、その地の豪族であったナガスネビコの妹をめぐり大和を統治していた。ニギハヤヒノミコト自身は若御毛沼命に穏便に統治権を譲渡したのだがニギハヤヒノミコトの義兄であるナガスネビコは抵抗し続けた。結局ニギハヤヒノミコトはナガスネビコを討ち取ることになった。

こうして若御毛沼命は荒ぶる神々を平定し、神倭伊波礼彦命（カムヤマトイワレヒコ・初代・神武天皇）となり、畝傍の白橿原宮で即位して天下を治めるようになった。

超人的な業績を残した神武天皇と8人の天皇

第2代綏靖天皇から第9代開化天皇までの天皇は「欠史八代」と称される。これら8人の天皇の記録がないにひとしいため、その存在は史実ではなく伝説に過ぎないというのだ。超人的な業績を残した初代・神武も同様である。だが古事記に描かれているその他の物語がそうであるようにそこには何らかの歴史的事実が反映されていると考えられる。



神武東征ルート 九州から近畿への神武東征は一説では飢饉に見舞われた九州からの民族移動を神話化したものと言われる。



絵画：神武天皇の御東征

三輪山伝説

第十代崇神天皇の時代に各地に疫病や飢饉が蔓延して多くの人民が死んだ。天皇はそのことを憂い嘆いていた。するとある時、大物主神（オオモノヌシノカミ）が夢に現れ、

「われの子孫であるオオタタネコノミコトを神官として我が御霊を祀らせれば神の祟りも怒らず国も安らかに治まるだろう。これこそが自分の望みである」と託宣した。

この託宣をきいた天皇は飛び起き、オオタタネコノミコトと呼ばれる人物を探した。使者はしばらくして河内で大物主神が告げた人物を見つけ連れ帰った。天皇がお前は誰の子かと尋ねると

「大物主神がイクタマヨリヒメを妻としてもうけたクシミカタノミコトの孫・タケミカヅチノミコトの子でオオタタネコノミコトと申します」と答えた。

それを聞いた天皇は喜び、すぐさまオオタタネコを大物主神を祀る神主として大和の三輪山に大物主の魂を拝み祀らせた。同時に各地に天津神や各土地の国津神が鎮まる社を祀らせた。

このオオタタネコの祖であるイクタマヨリヒメには次のような伝承がある。イクタマヨリヒメは端正な顔の美人だった。ある時、他に比べようがないほど美しく気高い青年が夜半に突然、ヒメのもとに現れた。ふたりは惹かれ合い結ればらくしてヒメは妊娠した。父母はそれを怪しみ「おまえには夫がいないのにどうして妊娠したのか」と問うと

「立派な人が夜ごとに来てともに過ごしているうちに身ごもりました」と答えた。

これを聞いた父母はその人物の正体を知りたいと思ひヒメに「赤土を床の前に散らし、糸巻きに巻いた麻糸を針に通して、その人の衣の裾に刺しなさい」と教えた。ヒメが父母に教えられた通りにして、翌朝みてみると針につけた麻糸が外へと続き、部屋の中には三勾（みわ・三巻の意）だけが残っていた。その糸をたどっていくと三輪山にいたり神の社の前に行き着いた。このようなわけでヒメの元を訪れる青年はその聖地に住まう神・大物主とわかったのである。

この地を三輪というのは麻糸が三勾だけ残っていたことに由来するのだという。

箸墓伝説

古事記での記述はないが同じように大物主神に嫁入りする話が日本書紀にある。倭迹迹日百襲姫（やまとととひももそひめ）は三輪山の大神主神の妻になった。大神主神はいつも、夜だけ会いに来た。ヒメは「昼にお見えになりませんので、そのお顔を見るのができません。どうかここにお泊りください。美麗で立派なお姿を拝見したく存じます」と言った。

大神主神は「言う事は道理である。翌朝お前の櫛笥に入っていることにしよう。どうか私の姿に驚かないで欲しい。」と応えた。ヒメは奇妙なことを言う心の中で思った。

夜明けを待って櫛笥を見てみると、本当に美麗な小蛇が中にいた。倭迹迹日百襲姫命は思わず驚いて叫び声をあげた。すると神は恥じてすぐに人間に変身した。大神は妻に「お前は、驚きを我慢せずに私に恥をかかせた。今度は私がお前に恥をかかせよう」と言った。そして大空を舞い三輪山に登っていった。その時に倭迹迹日百襲姫命は、それを仰ぎ見て後悔のあまり座り込みそして箸で陰部を突いて亡くなった。

箸は丹塗矢と同様に来訪する神が宿る依り代と考えられ、箸で女陰をつく話は、妻となる巫女と神の交わりを象徴する。彼女の遺体は大市に葬られ、「箸墓」と名付けられたその墓は昼は人が造り夜は神が造ったという。

倭迹迹日百襲姫神という女性に卑弥呼のような巫女的な女王ではなかったかとする説もある。



箸墓古墳【奈良県桜井市】

「日本書紀」の記述でも、聡明で英知に長け、霊能力が優れていたといひ、第十代崇神天皇の支配力を背後で支える存在だったことがうかがえる。倭迹迹日百襲姫神が妻となる大物主命は三輪山の主であるが、三輪山というのは大和朝廷にとつては非常に重要な祭場であった。神の託宣を受けて王者を補佐する預言的巫女という倭迹迹日百襲姫神の姿からは国の政治を左右する力を発揮した卑弥呼や神功皇后といった女性の姿が連想される。どちらも霊能力豊かな女性であったことはよく知られている。神さまとしてはいないが、その霊力は女神の中でも有数の力を隠し持っているといひだろ。

サホビコの反乱

古事記に記載されている古代天皇の歴史は策謀と権力闘争の記録だ。数々の神話がどれほど史実を反映しているのかはわからないがその複雑さからただの作り話とは思えないリアリティがある。

師木の玉垣宮において天下を収めていた第十一代・垂仁天皇の御代の頃。天皇にはサホビコノミコトの妹、サホビメをはじめとして多くの后があった。それらの后との間に男子13人、女子3人、合わせて16人の御子をもうけた。

数多くの后の中でも垂仁天皇はサホビメをことのほか寵愛した。だがある時、この后が大事件を起こす。サホビメは実兄のサホビコノミコトと近親相愛の関係にあつたらしく兄に言われるまま夫である垂仁天皇を暗殺しようとする。古事記によれば、八塩折の紐刀によって天皇の寝首をかくことを命じられ三度、挑戦するがかなわず夫を不憫に思ったヒメの涙が天皇の顔に落ちたとという。

実兄を愛した後の悲しい最後

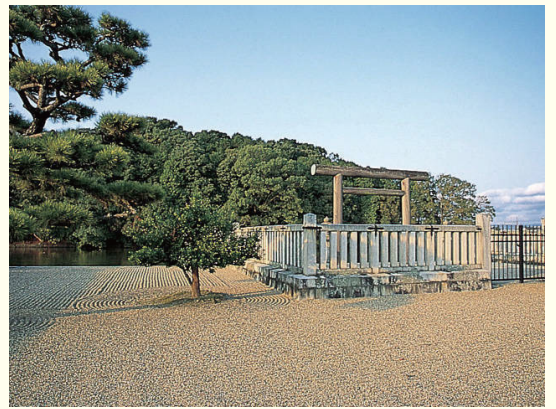
落ちた涙で目を覚ました天皇は「私は奇妙な夢を見た。大雨が降ってきて私の顔を濡らした。また錦模様の小さな蛇が私の頭に巻きついた。この夢はいつたい何の兆しであろうか」とサホビメに尋ねた。ヒメは耐えられず話してしまふ。これによってサホビコの策謀が明らかになるがヒメはあくまでも兄をかばった。当然のことだが天皇はサホビコを討とうとした。しかしサホビメは兄を守るために身ごもったままサホビコの館に籠城する。天皇は暫くの間、遠巻きにして見守った。両軍は長い間にらみあっていたがしばらくしてヒメが御子を産むとヒメはその御子を抱きいったん城から出て天皇に渡した。天皇はこの時、兵を差し向けて御子もろともヒメを奪還しようとしたが失敗する。ヒメはこの後も兄と籠城を続けついに最期を迎える。

御子はホムチワケノキミと名付けられた。この皇子は成長しても口を聞かなかつた。そんな中、天皇の夢に出雲大神が現れ、自分を祀れば御子は口を聞くだろうと託宣した。天皇が篤くこの神を祀ると御子の病は言え、話しだしたという。



炎に包まれるサホビメ

全長 227m の大型前方後円墳で、垂仁天皇の陵である菅原伏見東陵に治定されている。



垂仁天皇陵【奈良県奈良市】

全長 227m の大型前方後円墳で、垂仁天皇の陵である菅原伏見東陵に治定されている。



伊勢神宮【三重県伊勢市】

崇神天皇のとき、天照大神を大和に祭っていたのを近江から美濃を廻り、大神の鎮座すべき土地を求め、伊勢国度会郡の五十鈴川のほとりに移して皇女のヤマトヒメに祭らせ、自ら斎宮として奉仕させた。これが伊勢神宮の起こりである。20年に一度の式年遷宮が天武天皇のときから古式ゆかしく続いている。

各地を平定したヤマトタケル

第十二代・景行天皇の御代の頃、ある時天皇はオオネノキミの娘エヒメとオトヒメという美しい姉妹を後に迎えるために、御子のオオウスノミコトを遣わした。だがオオウスノミコトは姉妹の美しさに夢中になり自分の后にしてしまう。それからというものオオウスノミコトは天皇を避けるようになったので天皇は弟のオウスノミコトに兄を説得して連れてくるように命じたが一向に連れ帰らないので不審に思いオウスノミコトに尋ねると「厠から引きずり出し、つかみ潰して手足を引きぬき、袋に包んで投げ捨てました」と答えた。天皇はオウスノミコトの凶暴さを恐れ中央政権から遠ざけようと、九州にいる熊襲（くまそ）の討伐を命じた。

景行天皇の命を受けたオウスノミコトは伊勢神宮の齋宮であるヤマトヒメから衣装をもらい剣を懐にいられて出かけた。クマソタケルの屋敷につくと新築祝いの宴の準備をしていた。オウスノミコトは叔母からもらった衣装をきて女達にまじり家の中に入った。クマソタケル兄弟は女装したオウスノミコトとも知らず間に座らせて宴を楽しんだ。オウスノミコトはタイミングを見計らってまずクマソタケルの胸を刺し、オトタケルの背中をつかんで尻から刺し貫いた。クマソタケルは瀕死になりながらもオウスノミコトの素性を尋ねた。オウスノミコトが景行天皇の御子、ヤマトオグナノミコであることの名乗り、征伐にきたこと告げると

「西方にはわれわれを覗いて勇敢で強いものはいないが大倭国の国にはわれわれにまさる勇猛な男がいた。そこで自分の御名を献る。これからのちは、ヤマトタケルノミコと称えよう」といった。オウスノミコトはこの事を言い終えたクマソタケルを熟した瓜のように断ち切って殺した。

伊勢の能褒野で最期を迎える

オウスノミコトはその時よりヤマトタケルノミコトを名乗ることになる。ヤマトタケルノミコトは大和への帰路、出雲の支配者、山河の神、また海峽の神を平定しながら戻ることが天皇から歓迎されることはなかった。八咫の矛を授けられ、今度は東国の蝦夷を討伐せよと命じられる。その途中、伊勢神宮に詣で、叔母のヤマトヒメから「天叢雲剣」（三種の神器の一つ）と袋を授けられた。

尾張国を経て、山河の荒ぶる神々やまつろわぬ者たちをことごとく平定したが相武国（現在の焼津）ではその国造の計略にはまり、火を放たれた野に封じ込められた。タケルはこの時、ヤマトヒメにももらった「天叢雲の剣」で草を薙ぎ払い、ヤマトタケルは助かる事が出来た。「天叢雲の剣」は「草薙の剣」となり、この地を草薙と呼ぶようになった。タケルはさらに多くの国を平定していくがある時、草薙剣を置き忘れたまま伊吹の山の神を討ちにでかけ伊勢の能褒野で亡くなってしまった。タケルの魂は八咫のシロチドリとなって天を翔けていった。その御陵を白鳥御陵という。このように劇的なエピソードで綴られるヤマトタケルの一生は舞台などの題材ともされている。

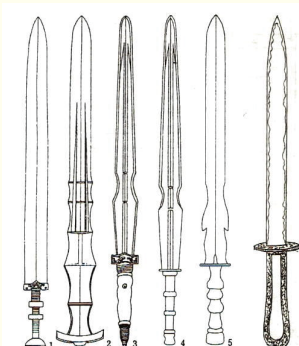


火を薙ぎ払うヤマトタケル

伊勢神宮の齋宮・ヤマトヒメからいただいた「天叢雲剣」はこの伝説以降「草薙剣」と呼ばれる。



各地を平定していくヤマトタケル



草薙剣の想定図（3.4.5）。
草薙剣の模造図（最右）。

神功皇后く神託を伝える巫女

歴代天皇の事績を伝える古事記の中で神功皇后は優秀な巫女として描かれている。悲劇的な最期を遂げたヤマトタケルノミコトの御子である第十四代・仲哀天皇は福井から和歌山、山口と都を変え、熊襲が謀反を起こしたと知らせを受けると筑紫に拠点を移して天下を治めようとした。ある時、仲哀天皇は太后のオキナガタラシヒメノミコト（のちの神功皇后）を巫女として帰神（神がかった状態で神託を得ること）を行った。その時天皇は琴を鳴らし、大臣の武内宿禰（たけうちのみすくね）が神官となって神託を求めた。神がかった太后は「西方には金銀をはじめとして輝くような珍宝がある。その国を攻めよ」との神託を伝えた。だが天皇は「高いところに上って西方を見ても国土は見えずただ大海があるだけだ。偽りを託す神だ」と神を罵り、琴をひくのをやめて黙ってしまった。すると神は大いに怒り「天下はお前が治めるべきではない。おまえは黄泉の国に向かえ」と呪った。

これを見た武内宿禰が「天皇よ、琴を奏でましよう」といさめたので天皇はふたたび琴を弾き始めるが数分も経たないうちにその音は途絶えた。天皇はすでに事切れていたのだ。驚き恐れた武内宿禰は天皇の遺骸をまがりの宮に移し、国の大祓をして、ふたたび神功皇后を巫女として神の言葉求めた。しかしこの時に得られた神託は「西方には」という前回の神託と一言一句同じでさらに神は「この国は神功皇后の腹にいる御子が治めるべきである」と教えた。神功皇后は妊娠したまま筑紫から玄界灘を渡り朝鮮半島に出兵して新羅の国を攻めた。新羅は戦わずして降服して朝貢を誓い、高句麗・百済も朝貢を約したという（三韓征伐）。朝鮮との外交と交易は御子の応神天皇が引き継ぐこととなる。

応神天皇の父は誰なのか

この時、神功皇后が身ごもっていた御子は第十五代・応神天皇となるのだが古事記および日本書紀によれば仲哀天皇の死後、一年以上も生まれなかったことになっている。



神功皇后と武内宿禰

つまり神功皇后が妊娠していた子の父が夫である仲哀天皇ではないことを暗にほのめかしていると考えられる。この示唆にはどんな意図があるのだろうか。一つの可能性として考えられるのは記紀に何度も出てくる「神と巫女との神婚」というテーマである。この御子の父は仲哀天皇ではなく、巫女である神功皇后に神託を授けた神（住吉三神のうちの一神）であると考える考え方もある。あるいは武内宿禰が父であるという可能性もある。武内宿禰は天皇につかえる実力者であり神官でもある。記紀の編者が応神天皇の実父であったということを知らせたかったのではないかと考えられる。



朝鮮出兵を告げる神功皇后

火の発祥地ともいわれる出雲国の一宮

熊野大社

島根県松江市八雲町熊野 2451



出雲大社と並ぶ大社である。出雲の祖神であるスサノオがこの地ではじめて火を生み出したという伝承がある。毎年、出雲大社の宮司が「古伝新嘗祭」に使用する火鑽臼と火鑽杵を受け取るために赴く。そして火鑽臼と火鑽杵で聖火をおこし、その聖火で神饌を調理し、宮司も食べる。

勝負に負けたタケミナカタがたどり着いた地

諏訪大社

長野県諏訪市中洲宮山 1

JR 中央本線「茅野駅」からタクシーで 10 分



全国の諏訪大社の総本山で諏訪湖を挟んで上社・下社に分かれている。稲佐の浜でタケミカヅチとの力比べに負けたタケミナカタが諏訪湖へと向い、追いかけてきたタケミカヅチに対し「もうこの地から決して出ない」ち誓い安住した。これがタケミナカタが諏訪大社に鎮座するいわれとなっている。

神話を織りなす日本最大の神社

出雲大社

島根県出雲市大社町杵築東 195

一畑電鉄大社線「出雲大社前駅」から
徒歩 15 分



オオクニヌシはアマテラスに国譲りをする条件として自分のために巨大な神殿を建てるように要求する。それが出雲大社である。江戸時代に造営された現在の御本殿は高さ 24m。しかし 2000 年に発見された巨大な柱の跡により 48m 説のひとつの根拠とされた。2016 年までは御本殿を含めた摂社などを修復する「平成の大遷宮」が行われている。

全国の神々が集まった国譲りの舞台

稲佐の浜

島根県出雲市大社町杵築北稲佐

一畑電鉄大社線「出雲大社前駅」からタクシーで 5 分



高天原から降りてきたタケミカヅチはオオクニヌシと浜辺の屏風岩の前で国譲りの交渉を行った。この浜では毎年旧暦 10 月 10 日の夜に神無月（出雲では神在月）の到来を告げる「神迎神事」が執り行われる。全国から八百万の神々を迎える重要な神事である。弁天島では海神ワタツミの娘のトヨタマヒメが祀られており「べんてんさん」と呼ばれている。

皇室の祖神にして日本人の総民神を祀る

伊勢神宮

三重県伊勢市豊川町 279

近鉄鳥羽線「伊勢市駅」から徒歩 5 分



内宮・外宮をはじめ 125 宮社で構成されている。内宮は皇大神宮と酔われ、この祭神のアマテラスは皇室の祖神として格別な存在だ。外宮は豊受大神宮と呼ばれここに祀られるトヨウケビメはイザナギとイザナミの孫で、五穀豊穡の神として崇敬を集めている。お伊勢参りの際は内宮よりも先に下宮を参拝するのがしきたりとなっている。

スサノオの魂が宿る地

須佐神社

島根県出雲市佐田町須佐 730

JR 山陰本線「江南駅」からタクシーで約 30 分



各地を巡行したスサノオは最期にたどり着いたこの地に自らの名を与えた。スサノオの終焉の地としてこの御魂が鎮まる霊地とされている。本社前には塩ノ井という小池がありスサノオが潮を汲んでこの地を清めたという伝説も残っている。

天孫降臨の地

高千穂神社

宮崎県西臼杵郡高千穂町大字三田井 1037

JR 豊本線「延岡駅」から宮崎交通バス「高千穂バスセンター」行きで約 80 分。終点下車、徒歩 10 分。



天孫降臨の地、高千穂については諸説あるがここ高千穂神社がある宮崎県の西臼杵郡だとする説が有力だ。この神社は 11 代・垂仁天皇の時代、ニニギとその子であるホデリが宮を築いた場所に建立された。高千穂の八十八社の総鎮守として大切にされている。

巨石に守られて眠るイザナミ

花の窟神社

三重県熊野市有馬町上地 130

JR 紀伊本線「有井駅」から徒歩約 13 分



イザナミはヒノカグツチを出産し火傷を負って亡くなったのち、この地に埋葬されたという。この神社に御本殿はなく熊野灘にめする高さ約 70m の巨石がご神体である。ご神体に対面する「王子の窟」にはヒノカグツチが祀られている。

スクナビコナを祀る神社

淡嶋神社

和歌山県和歌山市加太

南海加太線「加太駅」から徒歩約 10 分



国造りを行ったオオクニヌシとスクナビコナを祀る神社。淡嶋はスクナビコナが常世に旅だった地をいう説もある。社伝によると「雛人形」の「雛」というのはスクナビコナを略した言葉であり男雛と女雛の起源はスクナビコナと神功皇后の神像だといわれている。そのためこの神社には役目を終えたたくさんの人形が全国から寄せられる。

ニニギが選んだ土地

高千穂峡・真名井の滝

宮崎県西臼杵郡高千穂町大字三田井 1037

宮崎交通バス「高千穂バスセンター」下車、タクシーで 5 分



高千穂神社から歩いて 20 分ほどのところに「真名井の滝」が神々しく流れ落ちる高千穂峡がある。伝承によるとアメノムラクモはこの地に水がないことを知り、水種を天の真名井に移してこの地を潤した。この湧き水が真名井の滝の水源となっている。

国造り・国譲り神話の重要な場所

美保神社

島根県松江市美保関町美保関 608

JR 松江駅からバス「万原バスターミナル」からバスで 40 分
「美保神社入口」で下車徒歩すぐ



オオクニヌシの子であるコトシロヌシを祀る。オオクニヌシはこの地で国造りを一緒に行うスクナビコナと出会う。その後、国譲りを迫りにきたタケミカヅチが降りてきた時も、オオクニヌシは漁をしていたコトシロヌシをこの地に呼び出して可否を問うた。コトシロヌシは国譲りを受け入れるが、なぜかその直後に海中の青柴垣の中に身を斯くしてしまう。その真意は今も謎のままだ。

天孫降臨の案内役、サルタヒコを祀る

猿田彦神社

三重県伊勢市宇治蒲田 2-1-10

JR「伊勢市駅」から三重交通バス（内宮行き）「猿田彦神社前」すぐ



天孫降臨の際、サルタヒコはニニギの案内役をつとめる謎めいた地上の神として登場する。そのためサルタヒコは旅行者の安全を守る「みちひらきの神」と考えられている。拝殿の正面には昭和 11 年まで御神座があった場所に干支で方角を刻んだ八角の石柱があり、多くの参詣者が願をかけている。

崖に開いた洞窟がご神体

天岩戸神社

宮崎県西臼杵郡高千穂町大字岩戸 1073-1

JR日豊線「延岡駅」から宮崎交通バス「高千穂行き」で終点下車、町営バス「岩戸行き」終点下車すぐ



天岩戸神話が伝えられている場所。岩戸川を挟んで東本宮と西本宮が建っており、西本宮は崖に開いた洞窟をご神体とする。御本殿のある東本宮はオモイカネが石屋から出てきたアマテラスを導いた地だと言われている。

現世と黄泉国の境目

掛夜神社

島根県松江市東出雲町掛屋 2229

JR山陰本線「掛屋駅」から徒歩8分



現世と黄泉国を隔てている「黄泉比良坂」は出雲の国の「伊賦夜坂」と書かれている。掛夜神社はまさにこの伊賦夜坂の場所にあたるとされ、主祭神としてイザナミを祀っている。南東に1kmほど歩くと黄泉比良坂に比定される場所がある。この周辺一帯が現世と黄泉国を隔てる境界だったという説もある。

三種の神器のうちの一つ、草薙剣を祀る

熱田神宮

愛知県名古屋市熱田区神宮 1-1-1

名鉄「神宮前駅」から徒歩3分



スサノオが八俣の大蛇の尾から取り出した「天叢雲剣」。時を経てヤマトタケルの手に渡り数々の戦いで勝利をおさめ「草薙剣」と呼び名を変える。しかしヤマトタケルは剣を置いてでかけた際、無念にこときれてしまった。彼の妃のミヤスヒメは剣を熱田の地に祀ったという。また草薙剣は「三種の神器」のひとつとして崇められているため、熱田神宮は大きな存在感を放っているといえる。

クシナダヒメを守った伝承の地

八重垣神社

島根県松江市佐草町 227

JR山陰本線「松江駅」からタクシーで約15分



八俣の大蛇が襲ってきたときスサノオは「佐久佐女の森」の杉の木にクシナダヒメをかくまい垣を八重に覆って守った。この神社の奥の院にあったと言われ、奥の院の杉の木はクシナダヒメを守った大木の象徴といわれ今でも篤く守られている。この神話にちなみ八重垣神社は全国でも有名な縁結び神社となっている。